

世界が美少女帝国に 支配されたので、 性的に反逆してみた

上田ながの
挿絵／雪月竹馬

立ち読み版

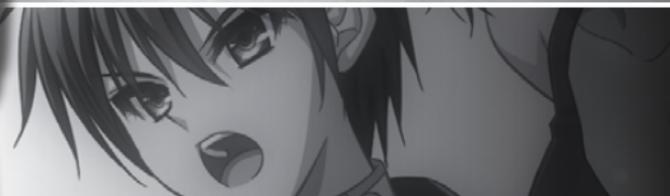




とうどう ゆきあつ

藤堂 雪篤

普通の学生として暮らしていたが、エロの素晴らしさを知り、エロで世界を変えることを決意する。



アスハ = ミコット =
コウガミ = リンカネート

異世界から次元転移し、地球を侵略した
リンカネート帝国の皇女。幼い頃に雪篤
と出会う。



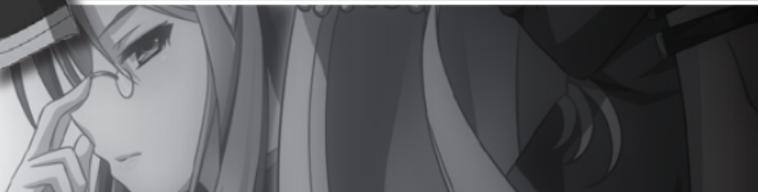
かざね あざか
風音 鮮花

帝国に反抗するレジスタンスの一員。
男女が自由にセックスできるような
世界にしたいと願っている。



**リナリス = フォルム =
マゲダナクア**

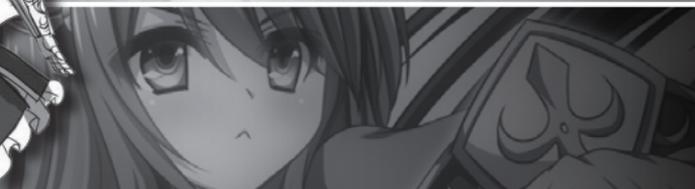
アスハの側近。執政官として帝国
の政治を動かす、沈着冷静な女。





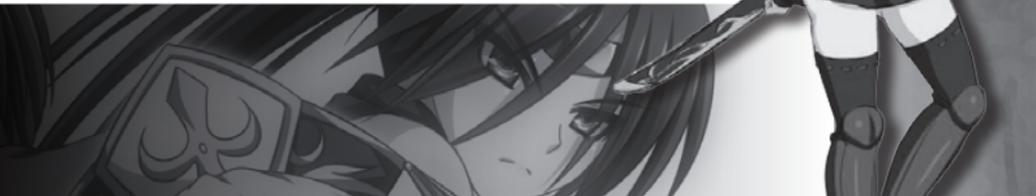
エレンシア = ローゼス

まだ若いが、帝国内でも有数の貴族の娘である為に将軍という地位に就いている。



しののめ りん
東雲 凜

エレンシアの側近を務める剣豪。昔からお世話をしていたエレンシアを溺愛している。



「なかなかいい反応だぞ。それほど挿入れて欲しかったのか？」

「そ……そんなはずありません！ 早く……離して！ そのおぞましいものをわたしから離しなさい!! このような酷いこと……許されない！」

「残念ながらそういうわけにはいかないな。だいたい……関係ない人々を散々殺しておいてよく言う！ これは罰だ！ 殺されないだけありがたいがたく思え。というか……天国まで見ることができるんだ。感謝しろよ。さあ……挿入るぞ」

何を言われようが聞き入れるつもりなど毛頭ない。容赦も躊躇もなく、雪篤は腰を突き出していく。

ぐじゅっ……じゅぶるっ……。ずちゅうっ！

「くひっ！ あっ——くひああああ……んっんんんん」

ズブズブと蜜壺を肉槍で挿し貫いていく。処女だった上、身体を鍛え上げている為だろうか？ 風音の膺よりも明らかにきつい締めつけがペニスに伝わってきた。無理矢理身体を二つに引き裂いていくような感覚が心地いい。

「ああ……は、挿入って……挿入ってきた。わたしの膺中に——これが……せ、セックス？ だ……駄目よ！ せ……んんん……セックスなんてしたくない！ 抜いて！ 抜きなさいっ！」

言葉だけでなく殺気まで向けてくる。並の人間であればこれだけで腰を抜かしてしまいうようなほどの覇気を感じた。この辺りは聖騎士団の副団長だけのことはある。

間違はなく以前の自分であればこの段階でペニスが萎えてしまっていたことだろう。

(だが……俺は変わった。風音と出会うことで生まれ変わったんだ！)

少し前までの生きながら死んでいた自分とは違う。セックスを覚えたことで、雪鷲の心には自信というものが漲みなっていた。

この程度の殺気などで怯んだりはしない。それどころか寧ろ、これほどまで自分を拒絶する相手を犯すということに喜びを覚え、歡喜の笑みさえ浮かべながら、腰を突き出していった。

「んっく……無理よ。挿入らない。はあっはあっはあっ……こんな大きい……挿入るわけない。お願い……もうやめて……壊れる。わたしが壊れてしまうから……」

「駄目だな」

懇願を聞き入れるつもりなどさらさらなく、膣奥まで容赦などせず肉槍を一気に突き込んだ。

ぶぢっ——ぶぢぶぢぶぢいいい！

「ひっぎ！ んぎいいいい!!」

ズンツと肉先が子宮口を突く。それと共に東雲は結合部から破瓜はかの血を一筋垂らしながら、悲痛な声を響かせた。

「どうだ？ 女になった気分は……。心地いいだろう？」

「ふ……ふざけた……ふざけたことを言わないで……。あああ……こ、こんなの……いい、

痛い……痛いだけよ。早く……は……やく……ぬ、抜きなさい……はあはあ……」

「そうか痛いか……。まあ初めてだから仕方がないか。だが安心しろ。俺の目的はお前を苦しませることじゃないからな。大丈夫すぐにその苦痛を快楽に変えてやるよ」

苦しみを与えることに意味などない。

セックスとはこれほどまでに気持ちがいいのだということをお教え込む。それこそが雪鷲のたいなる目的なのだ。

「快楽？ そんなこと……絶対……あ……んっんっ……あり得ないわ！ ころ……す……必ず貴様を斬つてみせる」

「必ず俺を斬るか——さて、その気力……どこまで保つかかな？」

ニタニタと笑いつつ、ゆっくりと腰を動かし始める。

できる限り痛みを与えないよう、優しいストロークで膣中を擦り上げていく。

「ふっぐ……むっ……。ひぎっ！ いっぎ……」

それでもやはり破瓜を迎えたばかりで敏感になっているらしく、東雲の表情は肉棒の動きに合わせて歪んだ。

「くっ……う、動かすな。痛い……痛いから動かすなあ」

「大丈夫だ。慣れればすぐに気持ちよくなる」

「馬鹿げたことを……い、うなあっ！ 気持ちよくななどならない！ ぜ、絶対に……」

肉壁を慣らすようにまずは浅い部分を亀頭で責める。ズンズンッと加える突き込み。それと同時により心地よさを感じられるように、手を伸ばして陰核を転がすように刺激した。それだけでなく、時には甲冑の中に手を入れ、乳房を揉みしだく。

「ふれ……るな……んっんっ……わ、わたしに……触れるなあ！ あっふ……んっんっん……くひんっ」

そのお陰か、漏らす吐息の中に徐々にだけれど甘い響きが混ざり始めた。

「どうした？ もしかして感じてきたのか？」

「馬鹿なことを言うな！ こんな……この痛いだけよ！」

「嘘をつくなよ。ほら……感じるんだろ？ おま○こズボズボちんぽで犯されながら、こうやってクリトリスを弄られて気持ちよくなってるんだろ？」

ぐちゅっ……ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……。

愉悅を否定する東雲を責め立てるようにクリトリスを指先で扱きながら、ペニスを少しずつ膣奥へと沈み込ませていく。

「んっひ！ あっあっあっ」

その動きに比例するように、女剣士が漏らす悲鳴の中に甘い響きが混ざり始めた。肉棒を蠢かせるたびに分泌される愛液量も増していき、膣中がドロドロになっていく。それと共に肉壁によるペニスの締め上げもきついものとなってきた。

「どうした？ 可愛い声が出ているぞ。それにこの締めつけ、まるで俺のモノを離すまい

とじているみたいだぞ。感じすぎじゃないのか？」

「嘘を……あふっ……あつあつあつ……う、嘘をつくな。そのような嘘をつかないで！ わたしは……わたしは……あつふ……このような、こ、のようなこと……で……はあつはあつ……感じたりなどし、ないっ！」

「なるほど……ではこの反応はどういうことなのかな？」

肉悦を否定する東雲を嘲笑いながら、突き込んだ肉棒で子宮口をノックするように何度も叩く。

「ふっひ！ あつ！ そこは……あつひ……ひんんん！ あつあつ……ふひあつ」

途端により甘い声を漏らし、蜜壺を収縮させてくる。精液を絞り出そうとしているかのようになきつい締めつけだった。

ばじゅんつばじゅんつばじゅんつばじゅんつ！

まるで身体中を肉襞で包み込まれているような快楽を覚えながら、容赦なく腰を振る。ズンズンと突き込みを加えるたびに奏でられる啼き声に、射精衝動が下腹部からわき上がってくるのを感じた。

そんな雪篤の射精感に連動するように、覗き見える東雲の白い肌が桃色に紅潮していく。全身から汗が溢れ出し、噎せ返るような発情臭が室内に漂い始めた。結合部から愛液が零れ落ち、太ももを濡らしていく。

「おかしい……あつあつあつ……こっれ……おかしい。まただ……これ、またくる。キス

してた時みたいにすごいのがまた……あつあつあつ——駄目だ。抑えられない……またあ
ああああ！

達しそうになっているのか、肉体をより小刻みに震わせ始める。

刹那、雪篤は腰の動きを止めた。

「——へ？」

呆然としたような視線を東雲が向けてくる。

「どうした？ その間の抜けた顔はなんだ？ もしかして……もつと奥を犯して欲しかったのか？」

「なっ——ば、馬鹿なことを言わないで。そのようなこと……あるはずがないわ！」

「だろ？ であれば止まったところで問題はあまるまい」

「そ……その通りよ」

どこか悔しげな表情を浮かべながら東雲は頷く。

そのような女剣士の姿をしばらく観察した後、雪篤はピストンを再開した。

「あつひ！ んんん！ ああああ！ また……またあああ！ んっんっんんん」

ズンズンと腰を振り始めると、再び嬌声を響かせ始める。

そしてすぐに——

「あああ……また、またくる！ まった……んんんん！ 気持ちいいのがくる。あつあつ
ああああああ」

「またも絶頂を思わせる嬌声を上げ始めた。

が、ここで絶頂させるつもりなどない。またも雪篤は腰の動きを止める。

「ど……どうして？ あ……な、何故？」

「何故？ それこそ何故だ？ 何故そのようなことを俺に聞く？ もっと動いて欲しかったのか？ それほどに気持ちよかったのか？」

「ち……違う……そんなことない……わ……」

快楽を否定するその顔は、いまにも泣きだしそうなものだった。

まともにやりあえば自分よりも遙かに強い東雲が見せる弱々しい姿に嗜虐心しみやくが刺激されていく。

もつとだ。もつとこの女を追い詰めたい。

増幅していく本能。

その感情が赴くままに、雪篤は女剣士を責めた。

何度も何度も腰を振り、絶頂直前まで女体を責めてはピストンを中断するという行為を繰り返す。東雲を嬲るように、何度も何度も――。

「あああ……また……。また止まった……。まったああ……。はあつはあつはあつ……」

そのお陰か、いつしか東雲は雪篤に対して絶すがるような、救いを求めるような視線を向けるようになっていた。それどころか、切なげにフリフリと自ら尻を振ってまどくる。

「どうした？ 何をしてもらいたいんだ？ 俺に何をしたい？ それをはっきり言う

んだ。そして俺に忠誠を誓え。そうすれば叶えてやる。お前の願いをな」

「ち……忠誠など……誰が……うつく……あつは……はあつはあつはあつ……わたしが……わたしが忠誠を誓うのはえれ……んしあ……様……ひ、姫様だけだ」

「なるほどな。だが……その点に関しては問題ない。すぐにエレンシアも俺達の仲間になるんだ。お前と一緒にいられるんだぞ」

「ひ……姫様が……わ、わたしと一緒に？」

「そうだ。しかもだ……、ただ一緒にいるだけじゃない。エレンシアと一緒に……快楽を得ることだってできる。俺に忠誠を誓えば、エレンシアと共に最高の悦楽を得られるんだ」

「最高の快楽を……姫様と共に……」

呆然としながらも、東雲は何かを想像するような表情を浮かべた。

が、すぐに首を横に振る。

「できない……姫様を売するような真似はできないっ!!」

「なるほど。素晴らしい忠誠心だ。だがそんなモノ持っていたところで……辛いだけだぞ」
残酷な笑みを浮かべると共に、責めを再開した。

何度も……。何度も何度も何度も何度も——ひたすら肉壺を穿ち続ける。子宮口を抉るように亀頭を繰り返し押しつけた。

「ふっひ！ ふひいいい！ あっあっ……おかしくなる！ こんな……わたしが……わたしでなくなるう」

そのたびに上がる無様な嬌声を耳にしながら……。
そして――

「もう……無理。が……我慢できない。もう堪えられない……。頭が……頭がおかしくなりそうなの……。だから助けて……わたしをた……すけてえ……」

「それはつまり絶頂きたいということか？ 快楽を認めるのか？」

「み……認める。あああ……認めるから……い、絶頂かせて……わたしを……い、絶頂かせて下さい……。お願いします……」

遂に東雲の心は限界を迎えた。

「俺に忠誠を誓うということだな？」

後背位で繋がりがあいなながら、こちらを振り返り潤んだ瞳で縋ってくる女剣士を見つめる。

「姫様も……本当に……気持ちよくなれる？」

「もちろんだ」

殺すつもりなど毛頭ない。

そのような行為に意味はないから。

あくまでも世界を変えることこそが、雪篤の復讐だった。

「わかった……なら……誓う！ わたしは忠誠を誓う！ 誓うから……絶頂かせて……い、絶頂かせて下さい……」

東雲凜はこの瞬間――堕ちた。

頂つくうっ!!」

ドクンッドクンッと脈打って多量の白濁液を東雲の膈中に流し込む。

女剣士はこれを受けながら、全身を壊れた玩具のように震わせ、より白濁液を搾り取るうとするかのようにキュウウツと肉壁を収縮させて達した。

「あっあっあっあっ……ふはああああ……」

うっとりとした甘い声で啼きながら……。

「ふうう……。最高だったぞ貴様の身体」

全身を弛緩させ、ぐったりして肢体を震わせる東雲を見つめながら、ズジュルツと肉棒を引き抜く。

「あっふ」

途端にぱっくり開いた肉孔から、流し込んだ多量の肉汁がドロリツと溢れ出てきた。

垂れ流れ落ちていく牡汁。

「はっひ……はひー……はひー……はひー」

騎士団の副団長が晒すにしてはあまりに無様な姿のまま、何度も東雲は肩で呼吸をする。

「あああ……。姫しゃま……。申し訳ありましえん……。わらひ……。こんにゃ……。こんにゃ……。気持ちはいいものに……。さ、逆らうことなんて……。れきましえん……。ごめんしゃい……

ひめしゃまあ……」

余程気持ちはよかったのか、呂律ろれつさえ回っていないかった。



亀頭が蕩けそうなほどに肉汁に塗れた膣壁を押し開いていく。襲の一枚一枚がねつとりと肉茎に絡みついてきた。

「はああああ……。凄い。ああ……。いいぞ。んっふ……。最高だ。このペニス……。いままで私が味わってきた中でも極上の一品だぞ。んんん……。はあっはあっはあっ……。気持ちいい。実に気持ちがいいぞ」

実に心地よさそうにうつとりと吹きながら、ギユウウツと肉壁を収縮させてくる。

「くあああああつ」

柔らかな肉壺が、きつく屹立を締めつけてきた。同時にうねうねと膣壁が蠢きながら、肉茎全体をヤワヤワと揉みしだくように刺激を与えてくる。

(なんだこれは……。？　くううっ！　すぐに……。すぐにでも射精でしまいそうだな)

これほど心地いい膣は正直初めてだった。まだ挿入したばかり。だというのに、肉棒が爆発してしまいそうなくらいに感じてしまう。

しかし、まだここで射精すわけにはいかない。相手に好きなように絶頂に導かれるなど、雪篤の矜持が許さなかった。

「何故だ？　くううう」

射精衝動を必死に抑え込みながら問う。

「何故？　んっんっ……。はあはあ……。何が何故なんだ？」

「ど……どうして……うつく……くふう……。なんでお前はせ、セックスの心地よさを知っていなから、それを広めようとしらない？　せ、セックスの快楽を知っているのであれば理解しているはずだろ？　帝国の施政が間違っているというのを！」

「帝国の施政が間違っている？　んつく……はあはあ……わ……私はそうは思わないな。んつく……あつあつ……んふうつ」

じゅぶつじゅぶつじゅぶつ……。

語りながら腰をくねらせるように蠢かせ続けてくる。腰を一回振るたびに、蜜壺は収縮し、よりきつくペニスを締め上げてきた。カリ首が肉襷で撫で上げられる。そのたびに全身にゾクゾクとした性感が走り、肉棒が暴発しそうになってしまふ。

「何故だ？　セックスを知っているのに何故……帝国が正しいと言える？」

「決まっているだろ？　んんんん……。し、臣民全員がこのような行為を始めてしまったら、誰もが快楽に溺れてしまうからだ。それでは国が立ちゆかん」

「しかし……それが人としての正しいあり方だろ！　第一……それを言うならなんでお前はセックスをしている!?」

「なんで？　あつふ……き、決まっているであろう？　私は選ばれし人間だからだ。特権階級だからこそ許される。セックスとは……私のような選ばれし者だけが楽しめれば……はあーはあーはあー……そ、それでいいのだよ」

語りながら腰を動かす勢いを上げてくる。ギシッギシッギシッとベッドが軋んだ音を奏

でた。

「ま……間違っている。お前の考えは間違っているリナリス！ 人は——誰しもが平等にあるべきだ！ 意思さえあれば、誰もが世界のどこへだつて行けるようであるべきなんだ！ 一部の者がそれを独占するなど……あっちゃいけない！」

壁の中に閉じ込められる人間などいてはならない。

エロ本を持っているだけで殺される人間などいてはならないのだ。

本能を抑え込まれて生きるなど、死んでいるのと同じなのだ！

雪篤はそれを知っている。知っているからこそ、リナリスの考えを受け入れることは絶対にできない。

「なるほど……んんん……あつふ……あつあつ……甘い考えだな。そのような情弱な考え……捨てることだ……。命が……んんん……い、いくつあつても足らんぞ。それより、そのような考えを捨て……わ、私のものにならないか？」

「お……お前のものになる？ どういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。私の男妾になれ。私専用の……んんん……肉奴隷になるんだ。さすれば……処刑命令は解除してやろう。ふーふーふー……。どうだ？ 悪い条件ではあるまい？ 命が助かる上、ずっと私と……せ、セックスし続けることが……できるのだぞ」

腰を振りながら、優しく頬を撫でてくる。

伝わってくる温かな掌の感触に、自然と瞳をうっとり細めてしまう。

覚えてしまう心地よさは、このまま溺れてしまってもいいのではないかとさえ思つてしまふほどだった。

それでも諦めるわけにはいかない。

生きたまま死んでいるような、以前の自分に戻るわけにはいかなかった。

「悪いが受け入れることはできない。それよりリナリスⅡフォルムⅡマグダナクア……お前こそ、俺のものになれ。そうすれば最高の快楽を刻みつけてやるぞ」

挑発するような言葉を向けつつ、ズンツと下から腰を突き上げる。

「んくひいっ」

亀頭で子宮口を叩くと、甘い悲鳴が室内中に響き渡った。

「……んんん……はあはあ……いまの……なかなかよかつたぞ。いいだろう。貴様の挑戦を受けてやるぞ小僧。私が堕ちるのが先か……お前が諦めるのが先か……勝負といこうではないか」

「ああ……いいだろう。どんな勝負であれ……勝つのはこの俺だ！」

「さて……そいつはどうかな」

繋がりあつたまま睨みあい、火花を散らす。

（これまでに何人もの女を墮としてきたんだ——いまさらこいつ一人に後れを取りはしない！）

闘志を燃やしながら、絶対の自信と共に突き上げるように腰を振る。肉壺を挿し貫かん

柔肉に指を沈み込ませていく。指と指の間から余った肉がはみ出る様子がイヤらしい。そのように卑猥な光景に興奮が高まつていくのを覚えながら、時には指先で勃起した乳首を摘んで引つ張るように刺激を与えたりもした。

「ああ……乳首……くううっ……感じるぞ。乳首……気持ちいい。あつふ……くひんっ」
 クリクリと指と指の間で乳頭を転がすと、ビクンッビクンッと肢体が跳ねるように痙攣し始める。

「あつふ……んんん……す……凄……こつれ……はあはあ……凄……想像以上だ。感じる……ああ……まさか、私がこ、ここまで感じるなんて……。んっんっ……はあ……いい。本当に絶頂つてしまいうまくないだ。こんなのは、初めてだぞ……あつあつあつ」

かなりの快感を覚えているらしく、のたうち回るようにリナリスは感じまくった。

「ふふふ……どうだ。気持ちいいだろ。俺のちんぽは感じるだろ？俺に従え——そうすればいつでもこの快感を味わわせてやるぞ。さあ、どうする？」

勝てる——執政官が見せる反応に、雪篤は己の勝利を確信した。

だが、そんな雪篤に対し、喘ぎながらもリナリスは微笑みを向けてくる。まるでこちらを嘲笑うような笑みを……。

「お前に従えば……んっんっんっ……この快楽をいつでも味わえる……か……。はあはあはあ……なるほど。わ、悪くはないな。魅力的ですらあ……んんん……はあはあ……ある

ぞ。だがな……」

上半身を曲げ、顔を近づけてくる。

「残念ながら勝つのは私……。んんん……。ふふ……」

鼻息が届くほどの至近距離でそう呟くと――

ぐちゅっ……。ちゅずうっ……。

「んんん」

唇に唇を重ねてきた。

もちろんただ口づけするだけでなく、口腔に舌を挿し込んでくる。

「んちゅ……。ぐちゅるっ……。んぼっ……。んちゅるっ……。ちゅぼお……」

うねる舌が口腔を蹂躪してくる。

(なんだ……。こいつのキス……。俺の……。俺の口の中に絡みついてくる。うああああ……。

口から……。俺の……。俺のすべてを吸い出そうとしてみるみたいだ)

ちゅぐっ……。ちゅちゅちゅちゅちゅっ……。ぬちゅっ……。ちゅぶるう……。

蠢く舌に口内がまさぐられていく。

「ずじゅるっ……。じゅちゅるるるう」

下品な音が響くのも厭わず、激しく口腔を吸引してくる。するとそれだけでなんだか頭が朦朧としてくるのを感じた。

「んっふ……。んふふふ……。んじゅっ……。ちゅぶっ……。んちゅちゅちゅちゅちゅう」

淫猥な水音が唇と唇の間で奏でられる。舌が蠢けば蠢くほど、弛緩していく全身。唇と秘部を中心に、肉体がリナリスの中に蕩けていくような、そんな気さえした。

身体中から力が抜け、抑え込んでいた射精衝動が爆発しそうになる。肉茎が膣中にて激しく震えだした。亀頭が不気味なほどに膨張していく。

（どういうことだ？ き……気持ちよすぎる。くっそ……このままでは射精する。射精してしまう。駄目だ……。堪えろ。俺が……。俺が先に絶頂くわけにはいかない!!）

いつ肉汁を撃ち放つてしまってもおかしくなくらいに、昂たかぶつてしまう肉体。明らかにこのキスだけで、状況は逆転してしまっていた。

それでも、自分に心の中で射精しては駄目だと何度も言い聞かせることで、何とか絶頂感をギリギリのところまで抑え込む。

「んっぶ……はああああ……。ほう……。まだ……。まだ堪えるか小僧。なかなかやるなあ。大抵の男であればこれだけで堕ちているところなのだがな」

「馬鹿め……。俺は……。こ、この俺はこの程度で堕ちたりしない」

瞳を潤ませながら、半開きになった口端から唾液を垂れ流すリナリスに対し、本当はかなり辛い状況ではあるけれど、必死に表面上は余裕の笑みを浮かべてみせる。

「なるほどな。だが……。本番はここからだぞ」

「ほん……。ば、ん……。だと？ な……。何をするつもりだ？」

「なに？ ふふ……。こうするんだよ」

すると疑問に対して応えるように、蜜壺がうねり始めた。

「なっ!! くあああああ……これは……なんだ? おおお! か、絡む。絡みついてくる! うっぐ……くふああ」

ただでさえきつい締めつけが、よりきつくなっていく。ただし、きつくなつたとはいっても、ただ肉棒を押し潰そうとしているようなものではなく、ペニスが肉壺の中に蕩けていってしまうのではないかと思えるほどに、柔らかく、心地よさを感じさせる締めつけだった。

(溶ける……俺のものが溶けてしまう……)

肉襷の一枚一枚が、まるで別個の生き物のように蠢き始める。まるで何匹、何十匹、何百匹、いや、何千匹ものミミズが肉棒の上を這い回っているようにさえ感じた。

視界が明滅するほどの性感を覚えてしまう。

「どうだ? んふううう……はあはあはあ……私のま〇こは最高だろ? ふふ……どんなに数多くの女を抱いてこようが、私のま〇こに勝る名器など存在しない。あつふ……あつあつあつ……さあ私に溺れるがいい」

ずじゅっ……ぐじゅるっ……ぬじゅっぬじゅっぬじゅう……。

ヒダヒダを絡みつかせながら、妖しく腰をくねらせてくる。蠢きに合わせて鳴り響く卑猥な水音に、より興奮と射精衝動が煽り立てられていく。

(駄目だ……溺れる。これは……こいつの言葉通り。溺れてしまう……うああああ)

肉棒から伝わってくる性感により、理性までもがドロドロに溶け始めるのを感じた。このままではそう長く保ちそうにない。

「我慢など……んんん……す、するな……。はあはあはあ……。素直になるんだ。快樂に身を委ねよ……」

グラインドを続けながら耳元でそつと言葉を囁いてくる。心の奥底にまで染み込んでくるような言葉だった。堪えようとする心が、ぐらぐらと揺れ動く。

いつそ本当に言われるがまま快樂に身を任せてしまおうか？

そう思ってしまう自分もいた。

（だ……駄目だ！ 流されるな！ 俺にはやるべきことがあるだろ！ 俺は親父の仇を討つ。この世界を変えることができるのはお……俺だけなんだ!!）

が、ギリギリのところ踏みとどまる。

とはいえ、堪えたところで状況を変えられるわけではない。

何か……何か手を打たなければ、早晚墮とされてしまうことは間違いなかった。

では、どうすべきか？

愉悦に堪えながらも必死に方策を考え――

（そ、そうか！）

一つの答えに雪篤は辿り着く。

（堪える？ 違う……逆だ。逆に考えるんだ。射精しちゃうでもいいさと考えろ！）

よくよく考えれば、別に射精Ⅱ敗北ではないのだ。

リナリスが墮ちるか、自分が諦めるか——大事なのはそこだ。
であるのならば、射精を我慢する必要などない。

「くらえっ！ はあああああつ!!」

寧ろ射精でしまったら射精でしまったで仕方がない——とでも言わんばかりの勢いで、
リナリスの動きに合わせて腰を振り始めた。

どじゅっどじゅっどじゅっどじゅっどじゅっ!!

「——なっ!? んつく……まさか……あひっ！ あっあっあっ——ひあああ！ こ
れは……んんんん……激しい。あひっ……んひんんん!!」

激しくペニスを突き上げる。子宮を押し潰さんばかりの勢いで、何度も肉先を膣奥に叩
きつけた。

この動きはリナリスも予想していなかったらしく、これまで見せてきた余裕は消え失せ、
焦りの色が表情に浮かんだ。室内に喘ぎ声が響き渡る。

「こ……こんなには、激しく動いて……。お前は……んっんっん……お前はしゃ、射精
する気か？ わった……しは……一度射精されたくらいで絶頂つたりはしないぞ。じ……
んんんん……自滅する気か？」

「自滅？ そんな気はないね……」

敗北することなどまったく考えてはいない。

「俺は勝つよ。必ずな……」

「しかし……あつあつ……このままでは、必ずお前の方が先に……い……絶頂つく……このことに……あつあつ……なる……なるぞ!」

「わかっている……。だが、それがなんだ? 先に絶頂く? 構わない。それがどうした! 一度や二度射精するくらいなんでもない。何度だって……俺はお前を絶頂させるまで何度だって射精してやる! お前が堕ちるまで——何度でもだ!」

じゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっ!

容赦など一切しない。腰と腰を激しくぶつけあいながら、何度もりナリスの肢体を上下に揺さぶった。ブルンッブルンッと乳房が激しく揺れ動く。いまにも壊れてしまいそうなくらいに、ベッドが軋んで軋んで軋みまくった。

「絶頂くぞ! まずは一発目だ! 受け取れ! 受け取れえええっ!!」
射精衝動が爆発する。

とどめとばかりにズンッと雪鷲は執政官の肉壺を抉るように突いた。

瞬間、肉先が開き、多量に白濁液が撃ち放たれる——はずだった。

「あ? な……なんだ? どういうことだ? 何が!? 何が起きている!!」

だが、何故か射精が始まらない。ビクビクと肉茎は激しく震えているのに、下腹部にたまった熱気を撃ち放つことができなかつた。

「どういうことだ? 締めつけられている……ああ……俺の……ちんぼの根元が……」

なんだ？　なんだこれは!!」

射精できない理由——それはペニスのつけ根を、収縮した膣口によって激しく締めつけられていることであつた。これにより、わき上がってきた白濁液が途中でせき止められてしまっている。

「どうしてだ？　あああ……射精せない……。射精せない!!」

気が狂いそうなほどの焦燥感を覚えた。

「ふふ……狙いはなかなか悪くなかつたぞ小僧。だが……残念ながら私の方が一つ上を行つていたようだがな」

そんな雪篤に対し、勝ち誇つた笑みをリナリスは向けてくる。

「どうだ小僧……射精したいか？」

「く……あああ……。だ、射精したい。射精したいっ!!」

敵の言葉だけれど、素直に頷いてしまう。それほど肉棒は焦れていた。

「そうか射精したいか……。ならば……私に忠誠を誓うか？　はあっはあっ……私の肉奴隷となるか？」

語りながら頬を優しく撫でてくる。

相手は敵だというのに、その姿はなんだかとても美しく見えた。

射精したい——素直に頷きたくなる。

「だ……誰がお前のものになど……」

しかし、それでもまだ雪篤は死んでいなかった。

折れることはできない。負けるわけにはいかない——最後の理性で拒絶の言葉を吐く。

「なるほど。しかし……その強気……いつまで保つかな？」

これに対し、リナリスは何故か笑った。最初から拒絶されることを望んでいたとでもいうように、本当に嬉しそうに……。

そして、雪篤の射精感が引いていくタイミングを見計らったかのように、グラインドを再開してくる。

ぐじゅっ！　じゅずぼっ！　ぶじゅっ！　じゅぼっじゅぼっじゅぼおっ！

「くあっ！　うああああっ！」

再びペニスに性感が走った。

「さあ……いつでも射精していいぞ。ほら……んっんっ……また射精したくなってきただろ？　あっあっ……んんんん……」

敵の言葉通り、一、二度膣壁で肉棒を擦り上げられただけで、再び膨れ上がってくる。一度達しそうになってしまった為か、自分の意志だけで抑え込むことなどできそうになかった。

「あああ……。まただ……。あああ、射精る！　こっれ……射精るっ!!」

我慢することなどできない。

自然と腰が動き、ズボッと再び膣奥に肉棒を挿し込んでしまう。

それと同時にドクンッと脈動する屹立だったのだが、

「あああ……まただ。まった……射精ない！ 射精せないっ！ うああああ」

再びリナリスの膣口が肉根を締め上げてくる。これにより、またも射精は中断させられることになった。

「どうだ？ 私のものになるか？」

脳髓にまで染み込むような問いかけが向けられる。

「私のものになるのであれば……射精させてやってもいいぞ……」

「お……俺は……この程度では堕ちない……」

それでも強い意志で拒絶する。

「そうか……。まあそれでも私としては構わんがな。ふふ……さて、たっぷり楽しませてもらうとしよう……。んっふ……あっ……あっあっあっ……」

ぐじゅっ……ぬじゅっぬじゅっぬじゅっぬじゅっ……。

「くああああっ」

再開されるピストン運動に、雪篤は犯される少女のように悲鳴を上げた。

*

それからいつたいどれほどの時間が経ったのか？

正直言うともまるでわからない。

まともな時間感覚など、繰り返し続けられる焦らし責めの前に完全に消え失せてしまっ

ていた。

射精したい。

思いきり肉汁を撃ち放ってしまいたい。

ま〇こにザーメンを流し込みたい。

そのようなことしか考えることができなくなっていた。

それでも――

「俺は……お前などに……」

敵を拒絶し続ける。

「んっふ……はあはあはあ……まさか……こ……んっんっ……ここまで堪えるとはな……
正直想像以上だよ……。あっふ……感動さえ覚えるくらいだ。んふふ……はあっはあっは
あっ……」

これにはリナリスですら感嘆の声を上げた。

「どうやらお前を私のものに……んんん……す、することは……はあっはあっ……不可能
なようだ。この勝負引き分けだ」

遂には雪篤を墮とすことを諦めるような言葉まで向けてくる。

けれども雪篤にそれを聞いている余裕はない。

(射精したい……。射精したい)

ひたすらその言葉が頭の中をループする。

「ふふ……私の言葉など……聞いてないか……。しかし、そ……そこまで……はあはあ……追いつめられてなお……屈さないとは見上げた奴だ。そんなお前に褒美だ……。最後に射精を許可してやる。さあ……んん……た、たっぷり射精すがいい」

そんな雪篤の頬を愛おしげに撫でながら、そう告げてくると、リナリスは根元への締めつけを緩めてきた。その代わりに、これまで以上に屹立全体を肉襲で締めつけてくる。

「うあっ！ で、射精るっ！ 射精るっ!! 射精るうううっ！」

瞬間、性感が爆発した。

我慢に我慢を重ねてきたものが、一気に放出される。

どびゅっ！ ぶびゅばっ！ どびゆるるるるうっ!!

「んっひ！ くひあっ！ あっあっあっ——射精てる。熱いのが……熱い汁が私の腔中に射精しているぞ！ ああああ……熱い！ 子宮が満たされていく……ああ……。絶頂くっ！ 私もい……絶頂く……ぞっ！ んっんんんんん！」

一瞬で膣だけでなく子宮までも満たすほどの射精量に、リナリスが肢体を痙攣させた。ブルンツとだらしない乳房を揺らし、肉壺を収縮させてこれまで以上にペニスを締めつけながら、背中を弓形に反らして達する。

震える白い肌が桜色に染まっていく美しい様を見つめながら、解放感を伴った脳髄までもが蕩けてしまうような愉悦に雪篤は溺れた。

「はあっはあっはあっ……。なかなかよかったぞ」



「さあ……どうして欲しい？ 言ってみろ」

そんなアスハに、脳髓にまで響くような言葉が向けられた。
どうして欲しい？

自分はいったい何をしてもらいたいのだろうか？

いや、そのようなことは考えるまでもない。

しかし、それを認めてしまつたら自分は……。

混乱する。頭の中がグチャグチャになっていく。

「殿下……素直になつて下さい。大丈夫です。何も不安に思うことはない。私達も一緒なのですから。ですから殿下……さあ、本能のままにお求め下さい」

すると、迷うアスハを後押しするような言葉をリナリスが向けてきた。

「一緒？ 皆が……一緒？」

「そうです殿下。ボク達も一緒です」

エレンシアを始めとする騎士やクルー達が頷く。

守るべき国の民達が、自分を見つめてくれていた。

「ねえ姫様……。あたしがいいことを教えてあげる。国つてのはね、皇帝や法律で成り立っているものではないの。大事なものはそこに住んでいる人の心なのよ。だから……国の制度なんてものは本来どうでもいいものなのよ」

風音鮮花が微笑む。

民がいればそれが国——であるのならば、皆が一緒にいてくれるのであれば、もうそれでよいのではないだろうか？

自分だけが辛い想いをする必要などないのではないだろうか？

「さあアスハ……何をしてもらいたい？」
改めて問われる。

「わ……わらわは……わら……わは……」

最早——限界だった。

「い……いき……」

潤んだ瞳で雪篤を見つめながら、

「……たい……」

絞り出すように口を開く。

「いき……たい……」

もう一度その言葉を呟く。

愉悦を感じたい。

快楽を刻み込んで欲しい。

本能が激しく訴える。

「もう我慢できないのじゃ……。じゃから……絶頂きたい」

気がつけば、自分の心が求めている言葉を、はつきり雪篤へと向けていた。

「絶頂かせてくれ。わらわを……頼む……絶頂かせてくれえ……」
皆が自分を見ている。全世界の臣民達がこの光景を見つめている——それを理解していても、本能を抑え込むことなどできない。

わき上がる情欲のままに、快楽を欲する。

「そうか……では、絶頂く為に何をしてもらいたい？」

絶頂く為に何を？

その言葉を聞いた刹那、脳裏に七年前の光景が思い浮かぶ。

雪篤と共に一緒に見た、あのエッチな本——その中で、男にペニスを突き込まれ、よがっていた女の姿が……。

「い……挿入れて……挿入れて欲しい……。雪篤のペニスをわらわの中に挿入れて欲しい。わらわは……ペ……ペニスで気持ちよくなりたい……雪篤のもので感じたい……のじゃ」
本能のままに求める。

「いいだろう。その望み……この俺が叶えてやる。ドレスをずらして、その場に脚を広げて横になるんだ」

「わ……わかった……。こ、こうか？」

命じられるがままドレスのハイレグ部分を自らの手で横にずらし、M字に脚を広げた。クパツと陰毛が一切生えていない秘部が左右に開く。穢れを知らないピンク色の柔肉が露わになった。

「殿下……なんとお美しい」

「綺麗なま〇こねえ」

皆の視線が秘部に集中してくるのがわかる。

（ああ……見られておる。このような姿を皆に……は、恥ずかしい。恥ずかしすぎる……。じゃが……恥ずかしいのに……。熱くなる。身体が……あそこが熱くなる）

ジュワリツと視線を向けられているだけで、分泌される愛液量がより増えていった。

「グシヨグシヨだな……準備は万端といったところか。よし……行くぞ」
ぐちゅっ……。

「んひんっ」

囚人服を脱ぎ捨て、肉棒を露わにした雪篤が膣口に亀頭を添えてくる。伝わってくる生温かな感触に、アスハの口からは嬌声が漏れ出す。

正直なことを言うと、ペニスが秘部に触れたというその事実だけで達してしまいそうなほどの性感を帝国の姫は覚えていた。

が、これはまだ始まりにすぎない。本番はここからだった。

じゅぶっ——ぐじゅぶっ……じゅぶじゅぶじゅぶずううっ……。

「あっ——あっあっあっあっ」

腰が突き出される。

凶悪なまでに膨張した肉槍が、ズブズブと膣壁を左右に押し開きながら、蜜壺へと沈み

込んできた。

(は……挿入ってきた……わらわの……わらわの膣中にペニスが……雪篤のものが挿入ってきたあ……)

下腹部に異物感が広がっていく。身体の中が巨大な杭に穿たれていくかのような刺激に、小柄な肢体が襲われた。

ブズブズと身体の中の何かが引き裂かれていくような感覚まで覚えてしまう。結合部からは一筋の血が流れ落ちた。

痛みが走る。

しかし、ひたすら愛撫を繰り返されてきた為か、痛みは本当に一瞬でしかなく、その後はすぐに、まるで身体の中の足りない部分を補われていくかのような、充足感にも似た感覚が全身を包み込んでいった。

「凄い……あああ……感じる……。これ……わらわを感じる……。感じるぞ……。あつあつ……気持ちいい。こんなに……こんなに気持ちいいなんて……。あつふ……んふっ……。あふあああ……」

肉棒の感覚が大きくなればなるほど、アスハが覚える性感は大きくなっていく。ゴリゴリと肉槍で膣道を擦り上げられるたび快楽が走る。肢体が何度も打ち震えた。

そして――

どじゅんっ！

「あつ！ くっひ……あつあつ——きつた、おく、おっくまできた……ペニスがわらわの奥まできて……ああああ……。い、絶頂くっ！ こんな……挿入れられただけ、な、のに……絶頂くっ！ あああ……絶頂く絶頂く……絶頂くうううっ!!」

肉先で子宮口が叩かれた瞬間、性感が爆発した。

キュウウツと収縮していく肉壺。切なげに眉根に皺を寄せながら、アスハは心地よい性感に溺れる。

「はあはあはあ……」

身体中から力が抜けていく。

何度も荒い息をアスハは漏らした。

「なんだ？ 挿入れただけで絶頂つたのか？ 処女のくせに感じやすすぎだな。実は相当オナニーをしていたらどろ？」

「そ……それは……」

「素直に答えろ。さあ……全世界の臣民に教えてやるんだ」

全世界の臣民——その言葉にゴクリツと喉を鳴らす。

皆がいまの自分を見ている。

男とセックスをしている自分を……。

ほんの少し前までの自分では絶対にはり得ないはずの事態。

その現実には、何故だか胸が高鳴っていく。達したばかりの肉体が、より熱くなっていく。

のを感じた。

「ああ……し、していた……。わらわはオナニーをしていた！ 毎晩のように……自分で自分を慰めていたのじゃ!!」

「そうか……。皇族であるくせに、禁じられた行為をしていたわけだ。いったい何を想像してしていたんだ？」

ニヤニヤ笑う雪篤が、更にアスハを責め立てるような言葉を向けてくる。

「お……お前じゃ……」

これに対し、アスハは素直に答えた。

*

「……え？」

アスハの言葉に、一瞬雪篤の思考は停止する。

いまなんと言ったこの女は？

聞き間違いだろうか？

「お前じゃ……わらわは……七年前から……ずっと……ずっとお前のことを想って自分で自分を慰めてきたのじゃ……」

いや、聞き間違いなどではない。

「そうか……俺を想って……」

自分を想ってオナニーをしていた——その言葉に、何故か喜びに似たものを覚える。ず

つと自分のことをアスハが想ってくれていたのだと考えると、それだけで胸が熱くなつていった。

「いいだろう。その想いに答えてやる！ 最高の快楽を刻みつけてやる!! アスハ……お前はもう俺のものだ!!」

どじゅっ……。じゅずぼっ……。じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ……。

言葉と共に本能のまま、肉壺を扶るような動きでピストンを開始する。

処女を奪ったばかりではあるけれど、加減をする余裕はなかった。貪りたい。アスハの肉体を想うがままに蹂躪したい——膨れ上がる本能のままに、腰をグラインドさせる。

「くっひ！ ああああ！ 凄い！ あっあっ……は、激しい。こっれ……激しすぎる！

あああ……でも……気持ちいい。感じる……感じてしまうぞ！ ああああ……いい！ いいぞお！ あっあっあふあああ!!」

これに対し、アスハが愉悦の悲鳴を漏らす。

時折眉根に皺を寄せるところを見るに、多少は痛みを感じてはいるようだったが、それ以上に快楽を覚えているらしかった。

ズンズンと蜜壺に肉槍を突き込むたびに、腔壁の締めつけがきつくなる。いまにもペニスガねじ切られてしまうのではないかと錯覚するほどにきつい。それでいて愛液でトロトロになった腔中は、ペニスが蕩けてしまうのではないかと錯覚するくらいに心地よかった。もっと気持ちよくなりたい。もっとアスハの身体で感じたい——自然と欲求が強まって



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※盗作フリーム等此書は、完全の著作権に入てきません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一ーホランス&ロマンティック満載!!!



二次元 DREAM MAGAZINE DREAM MAGAZINE



魔法、催眠、性転換：不思議Hコミック誌!

キョウネは闘いロマンティック



MEGAMI CRISIS メガミ クラISIS

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトで!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。